優秀賞［高校生の部］

2010年日本はハイブリッドな社会への入り口に立つ

神戸朝鮮高級学校3年
李（り） 舜志（すんじ）さん

私は神戸で生まれ育った在日コリアン3世だ。幼稚園から高校の卒業を目前にした今日まで朝鮮学校に通っている。学校の中はオールコリアンであるが、駅や電車の中、それに私の住む町のあちらこちらでは、日本語でない言葉が当然のように聞こえてくる。須磨から乗車するインターナショナルスクールの生徒たちは英語を使い、近所の保育園のお迎えにきたお母さんたちはベトナム語でおしゃべりをする。量販店ではポルトガル語で品定めをする親子がカートを押している。大きな声で携帯電話をかけている若者は中国語だろう。それは神戸という国際色豊かな街だからということだろうが、こういう環境に慣れている私から見てもあきらかに外国人の数は増加していると実感できる。コンビニでレジを打つ店員の名札があきらかにアジア系の外国人名であることにはもう慣れっこになって、ついついこちらがゆっくりと日本語をしゃべっている。

年々増加する外国人、少子超高齢化に悩む日本。ここに新しい接点は生まれないだろうか。

しかし日本は世界的にも珍しい「単一民族国家」であり、みんなが同じであることを何よりも優先し、それが全ての前提になっている国である。新聞にはヨーロッパの国々ではいかに移民問題で困っているかというような記事がのり、外国人犯罪という言葉がマスコミで当たり前のように流されている。人手不足の最たるものである看護師と介護士をタイやフィリピンから受け入れるというニュースを本当に日本人は諸手をあげて歓迎していると言えるであろうか。2003年にフランスで起きた移民子孫の若者たちの暴動を見て、日本でも同じような事態が起きる可能性を誰が否定できるというのだろうか。ここにはいわゆる欧米の先進国式の思考である単純労働イコール外国人労働者という図式がある。このような古い図式の外国人労働者受け入れではなく、新しいかたちである、異質な文化を持った人間がお互いを尊重し助け合える社会、すなわちハイブリッドな社会に日本が世界に先駆けて名乗りを上げるべきだと私は考える。

そのためにも外国人受け入れに関しての法整備と国民的合意を次の視点から進めていけばどうだろうか。

1. 留学生受け入れ200万人計画（10年間で）

中曽根内閣時代に発表された留学生100万人計画はなんとか達成されたが、ほとんどが中国系の留学生であった。これからはインドをはじめとするもっと広い範囲で、積極的に日本で高等教育を受けるメリットをアピールするとともに、財政的にも援助する行政および民間機関を創設することが必要である。

2. 市民権の導入

欧米諸国等で、人手不足が解消され景気が悪くなり、単純労働者の需要が減っても彼らが本国に帰らず不法滞在することによって様々な社会的な問題を引き起こしている。

しかし用が済んだら帰れでは済まないことも事実である。そこで条件付きで市民権のような在留資格を与え、彼らが普通に就職し暮らせるようにすべきである。

3. 日本語教育の強化と継承語教育の義務化

外国人が増加するということは必然的に家族である子供の数も増えるということである。大人だけではなく子供たちにこそ日本語を効率的に教える機関が必要とされる。

もちろん公教育の現場にそのニーズによって日本語教室というものが不可欠であろう。

そして、より深刻な問題は子供の年齢が幼ければ幼いほど日本語は堪能になるが、母国語は忘れたり、全くわからなくなってしまうという事態が間違いなく起こることである。せっかく異質な文化を背景に持っているのに、母国語を継承することができないということは、彼らのアイデンティティの形成過程においてもはなはだよろしくないことは自明であろう。それは日本人の子供たちにとっても幼い頃から異質な文化に接する貴重な体験となる。

4. 同化ではなく共生

日本で定住するのなら日本人に同化することを強制する現在の状況を改善し、文化は違うが同じ日本の町に住むお隣さんとして共生できる環境が必要である。さしあたって「帰化」という用語を「日本国籍取得者」と変更すべきであろう。

5. 人種差別禁止法案の制定

外国人が自分の生活に関わってくることを快く考えない人間は必ずいるものだ。匿名のネット上の掲示板では人間として許すことのできない差別発言がまかり通っている。

差別はよくないでは、差別はなくならない。差別は許さないという固い意志と罰則を伴う法律が必要である。そして同時に教育機関や報道機関で反人種差別教育を徹底し、人々の心の中からも差別意識をなくしていかなければならない。

以上の5点を2010年には始めるためにも、今から動き出す必要がある。何よりも新しいハイブリッドな社会が日本を新しい発展と、世界のリーダーたらん国へと強く牽引していくであろうことを、私は確信している。